

# 談話類型からみた現代漫才

## — 『M-1 グランプリ』 決勝ネタの分析 —

日 高 水 穂

### 1. はじめに

これまで日高水穂（2018・2019・2020・2021）において、昭和期（創生期・完成期・マンザイブーム期）の東西漫才を比較してきた。ここでは、愚役（ボケ役）と賢役（ツッコミ役）の軽妙な掛け合いによって笑いを生み出す上方漫才と、愚役の毒のある一言によって笑いを生み出す東京漫才という、東西のそれぞれで好まれる笑いの特徴が明らかになった。

1980年代初頭のマンザイブーム期以降の漫才は、テレビのバラエティ番組（ネタ番組）のコンテンツとして一般視聴者に受容されるようになったことにより、少なくともメディアの取り上げる範囲においては、東西の「笑い」の境界は曖昧になったように見える<sup>1)</sup>。

太田省一（2021）が「漫才ブームには、いわゆる「吉本の笑い」の全国区化という側面があった」と述べているように、1980年代初頭のマンザイブームは、その後の吉本興業の東京進出の契機となり、関西出身の「お笑い芸人」がテレビ番組を席卷する流れを作った<sup>2)</sup>。その流れを加速させ、決定づけたのが、1989年に本格的に東京進出を果たしたダウンタウン<sup>3)</sup>であり、現在の中堅以下の「お笑い芸人」は、東西を問わず、ダウンタウンの創った「笑い」に影響を受けた世代となっている。その世代がしのぎを削る『M-1 グランプリ』（ABC テレビ制作・テレビ朝日系）をはじめとするコンテスト型のネタ番組が、東西の「笑い」の融合と、新しい「笑い」の創造を牽引しているというのが、現在の状況である。

新しい「笑い」の創造という点では、『M-1 グランプリ 2020』で優勝したマヂカルラブリーのネタが「あれは漫才なのか」論争（太田 2021）を巻き起こしたことも、特筆すべきことであろう。彼らが決勝のステージで披露した2本のネタはいずれも、ボケ役の野田クリスタルがほぼ無言のまま、「センターマイクから離れたところで、野田の一人芝居による破天荒なボケが続」き、ツッコミ役の村上が「センターマイ

クの前で実況風のツッコミを入れる」というものであった。この「しゃべらない漫才」に対して、「少なからぬ視聴者が SNS などで「あれは漫才なのか」などと書き込んだところ、「あれは漫才だ」といった反論がなされ、「松本人志など、当日の審査員や他のお笑い芸人をも巻き込んだ大論争に発展した」のである（太田 2021）。

こうした論争が起こるのは、「漫才らしい漫才」のイメージが一般に共有されており、「新しい「笑い」の創造」が「漫才らしい漫才」の型を踏襲しつつ破壊する（「破壊」の部分が論争になる）ものだからであろう。マヂカルラブリーは、神奈川県出身の野田クリスタルと、愛知県出身の村上のコンビであるが、こうした非関西出身のコンビが、「漫才らしい漫才」の型を破壊する形で登場してくるのには、東西の「笑い」の志向性の相違が影響を及ぼしていると思えなくもない。

本稿では、談話類型の観点から「漫才の型」を分類したうえで、『M-1 グランプリ』決勝ネタの分析を通して、東西の「笑い」の志向性の相違が、現代漫才にどのように反映しているのかを探っていく。

## 2. 漫才の分類

### 2.1 前田勇氏の分類

前田勇（1975）は、「大正中期以降、昭和 30 年代の今日に至るまでの間」の漫才のジャンルを、以下の 4 類 10 種に分類している。

表 1 漫才のジャンル（前田 1975：198-199 の記述を元に作成）

(一) 音曲漫才	①俗曲漫才（民謡・俗曲の類を主とするもの） ②語りもの漫才（浪曲・浄曲・琵琶の類を主とするもの） ③歌謡漫才（流行歌・歌謡曲の類を主とするもの） ④曲弾き漫才（楽器の曲芸的演奏を主とするもの）
(二) 踊り漫才	⑤踊り漫才（本格的舞踊を滑稽にくずして見せるもの）
(三) しぐさ漫才	⑥寸劇漫才（舞台劇・映画劇等の断片を演ずるもの） ⑦身振り漫才（身振り・表情を主とするもの） ⑧仮装漫才（仮装を見せるもの）
(四) しゃべり漫才	⑨掛け合い*漫才（掛け合いでしゃべるもの） ⑩ぼやき漫才（本質的には漫談の一種にすぎないもの）

※元の表記は「掛け合い」だが本稿では「掛け合い」とする。

この分類に従えば、日高（2018）で分析した〈創生期〉の上方漫才コンビ芦乃家雁玉・林田一郎の「元は役者」の本ネタ部分や、日高（2019）で分析した〈完成期〉の東京漫才コンビコロムビアトップ・ライトの「おとばけ名舞台」の本ネタ部分は、いずれも寸劇漫才の形式を取っていると言える。

さらに、前田（1975）は、以下のように述べる。

二人の人物が会話のみによって賢愚関係を具現するものが（四）である。そこで（四）こそが漫才であって、それ以外は漫才でないという言説も、すでに一部の人によって提出されている。しかしそれが現実を無視した、いわば希望的言説にすぎないことは明白である。（中略）漫才とは二人の人物が、相互に賢愚関係にあることを、何等かの手段・方法をもって具現する芸能であると、定義づけることができるであろう。（前田 1975：201）

上記の記述からは、〈完成期〉の段階においてすでに、「二人の人物が会話のみによって賢愚関係を具現するもの」こそが漫才である、という言説があったことがうかがえるが、その一方で、会話以外の要素を含んだ「漫才」も、当時、依然として存在していたこともわかる。

## 2.2 「しゃべくり漫才」の位置づけ

前田（1975）では（四）が「しゃべり漫才」となっているが、前田勇編（1966）の分類では、これが「しゃべくり漫才」となっている。ここで、前田氏の分類の「しゃべ（く）り漫才」と、現在の漫才の分類における「しゃべくり漫才」との関係を整理しておきたい。

太田（2021）は、「漫才は大別すると、しゃべくり漫才とコント漫才にわけられる。このうち、友人同士の日常的な雑談のようなスタイルを基本にしたのがしゃべくり漫才であり、ネタのなかで客と店員、交際中のカップルといった設定を決め、その役を演じるのがコント漫才である。」と説明している。元祖爆笑王編（2015）も、漫才を「しゃべくり漫才」と「漫才コント」に分け、「しゃべくり漫才というのは、ずっと自分たち自身の言葉でしゃべっていきます。で、漫才コントというのは、最初は漫才から入って行って、途中から役に入って発言していく、つまり途中でコントに入るスタイルです。」と説明している。

現在の漫才の分類では、「ずっと自分たち自身の言葉でしゃべっていく」スタイ

ルと「役に入って発言していく」スタイルの区別を重視し、前者のスタイルで演じられる漫才を「しゃべくり漫才」と呼んでいるのであるが、これは、かつて存在していた「音曲漫才」「踊り漫才」「しぐさ漫才」という漫才のジャンルが消失し（これらの漫才のジャンルがあったことが忘れられ）、漫才とはそもそも会話のみで展開するものであり、そのなかでも「ずっと自分たち自身の言葉でしゃべっていく」スタイルこそが「漫才らしい漫才」（＝「しゃべくり漫才」）である、という意識が定着したことを意味しているだろう。

前田氏が漫才の分類を行った〈完成期〉にも、「コント漫才」と言えるネタは存在していた。たとえば、日高（2019）で分析した〈完成期〉の上方漫才コンビ夢路いとし・喜味こいしの「交通巡査」の本ネタ部分は、交通巡査（こいし）に職務質問を受ける男（いとし）の会話で展開しており、また、同じく日高（2019）で分析した〈完成期〉の東京漫才コンビ獅子てんや・瀬戸わんやの「温泉旅行」の本ネタ部分も、旅行代理店の店員（てんや）と客（わんや）というコント設定になっている。

前田氏の「しゃべ（く）り漫才」は、「掛け合い漫才」と「ほやき漫才」に下位分類されているが、「掛け合い漫才」は「Aが発した言葉をBが受けて、それをまた返す、といった言葉のキャッチボールで進行していく」ものであり、「ほやき漫才」は「一人の演者の漫談に近く、この言葉のキャッチボールが全くない」ものを言う（相羽秋夫1995）。この分類によれば、「コント漫才」は「掛け合い漫才」の一形態ということになるだろう。なお、「コント漫才」は、既成の「舞台劇・映画劇等の断片」を演じるものではなく、独自に設定した仮想のキャラクター（以下「仮想キャラクター」）を演じるものなので、「寸劇漫才」に含めることはできない。したがって、あくまでも前田氏の分類では、「コント漫才」は「掛け合い漫才」の一形態（したがって「しゃべ（く）り漫才」の下位類）に位置づけられると見なせるのである。

1969年に刊行された獅子てんや・瀬戸わんや監修の『漫才漫談一週間上達法』という入門書では、「漫才の話題教室」という章のなかで「コント」が取り上げられている。当時の意識では、「コント」は漫才のネタ（話題）の一つであり、現在のような「コントに入る」漫才と「コントに入らない」漫才を区別する意識はなかったものと見られるが、これは、〈完成期〉までの漫才が、演者のパーソナルな側面を舞台上に持ち込まなかったことが、要因の一つとしてあるだろう。たとえば、〈完成期〉を代表する上方漫才コンビの中田ダイマル・ラケットと夢路いとし・喜味こいしは、いずれも兄弟コンビであるが、舞台上ではそうしたパーソナルな関係性を持ち込まず、知人同士の二人の男という関係性を貫いていた<sup>4)</sup>。コロムビアトップ・

ライトに至っては、「ライト」役が初代から二代目に入れ替わっているが、こうした芸名を引き継ぐ形での「代替わり」は、演者のパーソナルな側面をネタにしている場合には、成立し得ないことである。

演者のパーソナルな側面を積極的にネタにするようになったのは、上方漫才コンビでは、横山やすし・西川きよしあたりからである<sup>5)</sup>。彼ら以降の〈発展期〉の漫才コンビは、パーソナルなキャラクターをまとった「本人」（以下「本人キャラクター」）として舞台上に登場するようになったため、現在の漫才の分類では、「ずっと自分たち自身の言葉でしゃべっていく」スタイルを取るか、途中で「役に入って発言していく」スタイルを取るかが、漫才の演じ方の違いとして、強く意識されるようになったものと思われる。

### 3. 談話類型による漫才の分類

#### 3.1 発話方向からみた漫才の型

日高（2020）でも紹介したが、岡本雅史（2018）によると、いわゆる漫才型の対話は、「対話形式でのやり取りでありながらその指向性が直接の参与者だけではなく外部のオーディエンスにも開かれているという二重の指向性」をもつ。また、「いずれかの対話者が外部にいるオーディエンスのための〈共感チャンネル〉の役割を果たすことが多く」、漫才の対話では、ツッコミ役がその役割を担う。

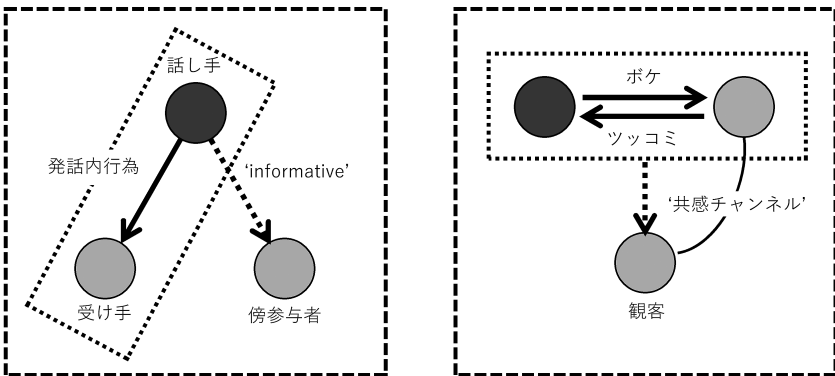


図1 発話の内部指向性と外部指向性（岡本2018）

一方、漫才談話は、演者が聴衆を直接の聞き手として語りかける場合もあるため、

発話方向としては、対相方発話と対聴衆発話があり得る。対聴衆発話は、本人キャラクターが発するものであるが、対相方発話は、演者の両方が本人キャラクターもしくは仮想キャラクターである場合と、仮想キャラクターを演じている相手に対し、本人キャラクターとしてことばをかける場合がある。日高（2020）では、こうした漫才談話の発話キャラクターと発話方向を表2のように整理した。

表2 漫才談話の発話キャラクターと発話方向（日高 2020）

聞き手 話し手		演者A（愚役）		演者B（賢役）		聴衆
		本人	仮想	本人	仮想	
演者A （愚役）	本人			対相方発話	対相方発話	対聴衆発話
	仮想				コント発話	
演者B （賢役）	本人	対相方発話	対相方発話			対聴衆発話
	仮想		コント発話			

前田（1975）の「掛け合い漫才」は、対相方発話の掛け合いにより展開する漫才であり、このタイプの発話方向をもつ談話を「対話型」と呼ぶことにする。現代漫才の大多数は、この「対話型」の談話によって展開する（図2）。

また、前田（1975）の「ぼやき漫才」は、演者の一方が対聴衆発話を行い、もう一方の演者との掛け合い（対話）が行われないものであるが、こうした対聴衆発話により展開する談話を「演説型」と呼ぶ

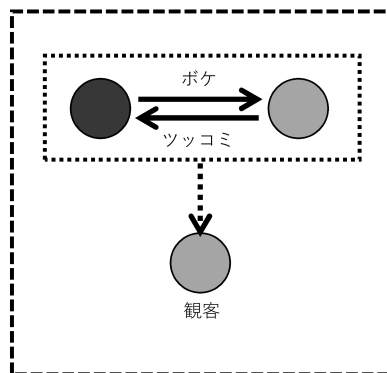


図2 対話型の漫才談話

ことにする。漫才における「演説型」の談話は、演者の一方の談話型なので、漫才の型としては、ボケ役・ツッコミ役のいずれが対聴衆発話を行うのかと、もう一方の演者がどのようにふるまうのかによって、さらに下位類を設けることができる（図3）。

いわゆる「ぼやき漫才」は、ボケ役が聴衆に向かって「世の中の不平不満をぶつぶつと発することを主体とする漫才」（相羽秋夫 2001）である。その創始者は都家文雄<sup>6)</sup>であり、上方では、人生幸朗（相方・生恵幸子）、東文章（相方・こま代）、西川のりお（相方・上方よしお）、横山たかし（相方・ひろし）、大木こだま（相方・

ひびき)、東京では、コロムビアトップ(相方・ライト)、ビートたけし(相方・きよし)がこれに入るとされる(相羽 2001)。

前田(1975)では「ほやき漫才」を漫談の一種と見なしていることから、ここでは、ボケ役が「演説型」の談話を展開し、ツッコミ役がそれに合いの手を入れたり、なだめたり、訂正したりする漫才の型を「漫談類A(ボケ漫談)」と呼ぶことにする。ナイツ、ウーマンラッシュアワーなどがこの型のネタを多く手がけている。

また、「演説型」の漫才には、ツッコミ役が「話題提供」の対聴衆発話を行い、それをフリとしてボケ役が毒舌をはいたり、意表を突いた言動でボケるタイプのものがある。このタイプの漫才の型を「漫談類B(ツッコミ漫談)」と呼ぶことにする。爆笑問題、オードリーなどがこの型のネタを多く手がけている。中川家もネタの一部にこの型を織り込むことがある。

「漫談類」の対聴衆発話は、ネタのフリになる「話題提供」の役割を担う。それに対して、ボケ役が「声の人」となり、ツッコミ役の言動に対して意表を突いた「実況」を行う、あるいはボケ役の「実況」に合わせてツッコミ役が操り人形のように動き回る、というようなネタがある。また、近年の漫才でよく見られるようになったものとして、ボケ役のみがコントに入り、ツッコミ役がその様子を「実況」しながら、ボケ役の言動の「おかしさ」を指摘していくというものがある。こうしたネタの「実況」の発話方向は対聴衆発話となるため、これらも「演説型」の下位類に位置づけられるが、この場合の対聴衆発話は「話題提供」ではなく、演者の一方の言動を解説する「ナレーション」のような役割を果たす。ここでは、このタイプの漫才の型のうち、ボケ役が実況を行うものを「実況類A(ボケ実況)」、ツッコミ役が実況を行うものを「実況類B(ツッコミ実況)」と呼ぶことにする。

「実況類A」のネタを多く手がけている漫才コンビとしては麒麟が挙げられるが、往年のコント55号なども、萩本欽一の無茶ぶりに坂上二郎が困惑しながら動き回るというお決まりのパターンがあり(コント55号の萩本と坂上の関係を漫才のボケ役とツッコミ役にあてはめるのは妥当ではないかもしれないが)、コンビ芸の型の一つとなっているとは言えるだろう。

「実況類B」は、「あれは漫才なのか」論争を引き起こした『M-1グランプリ2020』のマヂカルラブリーのネタが該当する。また、『M-1グランプリ2018』で優勝した霜降り明星のネタも、「せいやが設定に合わせて何人も役を演じながらボケ続け、粗品がその都度、テンポよくツッコミを入れていく」(太田 2021)というもので、「実況類B」に分類できるだろう。

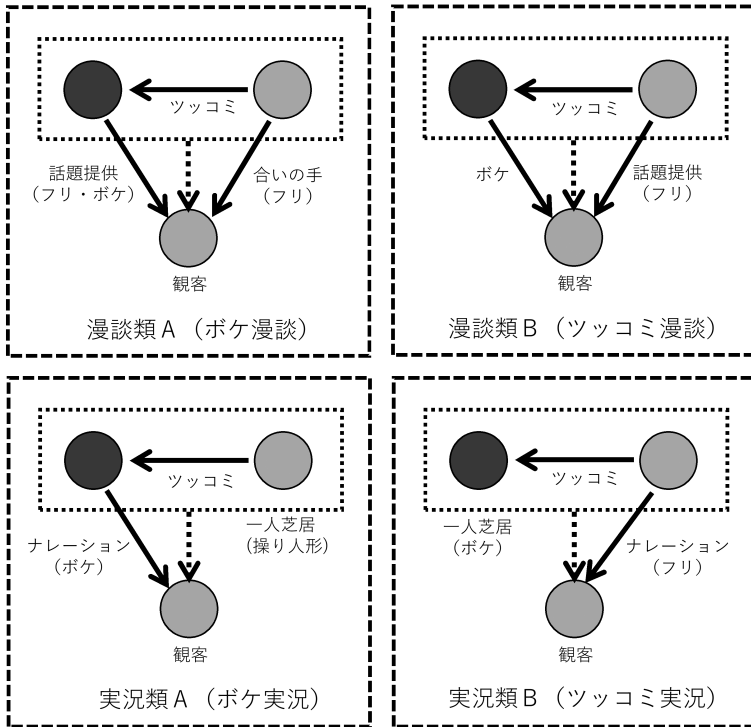


図3 演説型の漫才談話

### 3.2 『M-1 グランプリ』 決勝ネタの分析

#### 3.2.1 調査の概要と結果

以上の談話類型による漫才の型の分類に基づき、『M-1 グランプリ』 決勝ネタを分析してみたい。

『M-1 グランプリ』は、2001～2010年および2015年から現在まで毎年1回開催されているコンテスト型のネタ番組である。予選を勝ち上がった8～9組と敗者復活の1組の計9～10組(2002～2010・2015・2016年は全9組、2001・2017～2020年は全10組)が決勝のファーストラウンドで4分程度のネタを披露し、審査員の得点順に上位3組(2001年は上位2組)がファイナルラウンドで2本目のネタを披露する。以下で分析対象とするのは、2001～2010年と2015～2020年の決勝大会に出場した計74組のコンビによる192本のネタである<sup>7)</sup>。

分析にあたっては、まず、活動拠点が大阪であるコンビ(上方系)と東京である



コンビ（東京系）に大別し、ボケ役とツッコミ役の出身地によって、①ボケ役：関西／ツッコミ役：関西、②ボケ役：関西／ツッコミ役：非関西、③ボケ役：非関西／ツッコミ役：関西、④ボケ役：非関西／ツッコミ役：非関西に分けた。なお、活動拠点はコンビ結成時の所属プロダクションの所在地とした<sup>8)</sup>。

漫才の型は、「対話型」と「演説型」に大別し、「演説型」は「漫談類A（ボケ漫談）」「漫談類B（ツッコミ漫談）」「実況類A（ボケ実況）」「実況類B（ツッコミ実況）」に分類する。「対話型」には本人キャラクターのまま会話が展開するものと、途中で仮想キャラクターに切り替えて（コントに入って）会話が展開するものがあるが、ここではこの区別は設けない。

漫才談話は、〈開始部〉であいさつや自己紹介が行われ、〈主要部〉でネタが展開し、〈終了部〉で終わりのあいさつが行われる、という基本構造をもつ（日高2018）が、漫才の型は〈主要部〉の本ネタ部分の演じ方により分類した。複数回の出場により、異なる型のネタを披露している場合は併記した。

以上の手順で整理した結果を以下の表3・表4に示す。漫才の型は「演説型」の4類を太字で示す。コンビの配列は初出場年と当該大会での登場順によっている。

表3 大阪を活動拠点とするコンビの出身地と漫才の型

コンビ名	ボケ役 (出身地)	ツッコミ役 (出身地)	初出 場年	ネタ数 / 出場回数	漫才の型
①ボケ役：関西／ツッコミ役：関西					
中川家	剛 (大阪府)	礼二 (大阪府)	2001	2/1	対話型
フットボールアワー	岩尾望 (大阪府)	後藤輝基 (大阪府)	2001	7/4	対話型
チュートリアル	徳井義実 (京都府)	福田充徳 (京都府)	2001	4/3	対話型
アメリカザリガニ	平井善之 (大阪府)	柳原哲也 (大阪府)	2001	3/3	対話型
キングコング	梶原雄太 (大阪府)	西野亮廣 (兵庫県)	2001	4/3	対話型
麒麟	川島明 (京都府)	田村裕 (大阪府)	2001	8/5	対話型 実況類A
ますだおかだ	増田英彦 (大阪府)	岡田圭右 (大阪府)	2001	3/2	対話型 漫談類A
ハリガネロック	ユウキロック (大阪府)	大上邦博 (奈良県)	2001	3/2	漫談類A

笑い飯	哲夫 (奈良県)	西田幸治 (奈良県)	2002	14/9	対話型
2丁拳銃	小堀裕之 (奈良県)	川谷修士 (兵庫県)	2003	1/1	対話型
りあるキッズ	安田善紀 (奈良県)	ゆうき (大阪府)	2003	1/1	対話型
アジアン	馬場園梓 (大阪府)	隅田美保 (兵庫県)	2005	1/1	漫談類 A
ブラックマヨネーズ	吉田敬 (京都府)	小杉竜一 (京都府)	2005	2/1	対話型
変ホ長調	小田ひとみ (京都府)	彼方さとみ (大阪府)	2006	1/1	対話型
ライセンス	藤原一裕 (奈良県)	井本貴史 (奈良県)	2006	1/1	対話型
ダイアン	西澤裕介 (滋賀県)	津田篤弘 (滋賀県)	2007	2/2	対話型
モンスターエンジン	西森洋一 (大阪府)	大林健二 (大阪府)	2008	2/2	対話型
NON STYLE	石田明 (大阪府)	井上裕介 (大阪府)	2008	4/2	対話型
ジャルジャル	福徳秀介 (兵庫県)	後藤淳平 (大阪府)	2010	6/4	対話型
銀シャリ	鰻和弘 (大阪府)	橋本直 (兵庫県)	2010	4/3	対話型
アキナ	山名文和 (滋賀県)	秋山賢太 (兵庫県)	2016	2/2	対話型
さらば青春の光	東ブクロ (大阪府)	森田哲矢 (大阪府)	2016	1/1	対話型
さや香	新山 (大阪府)	石井 (大阪府)	2017	1/1	対話型
ミキ	亜生 (京都府)	昂生 (京都府)	2017	3/2	対話型
ギャロップ	毛利大亮 (京都府)	林健 (大阪府)	2018	1/1	対話型
霜降り明星	せいや (大阪府)	粗品 (大阪府)	2018	2/1	実況類 B
すゑひろがりず	三島達矢 (大阪府)	南條庄助 (大阪府)	2019	1/1	対話型
ミルクボーイ	駒場孝 (大阪府)	内海崇 (兵庫県)	2019	2/1	対話型
インディアンズ	田淵章裕 (兵庫県)	きむ (大阪府)	2019	2/2	対話型

②ボケ役：関西／ツッコミ役：非関西					
南海キャンディーズ	山崎静代 (大阪府)	山里亮太 (千葉県)	2004	4/3	対話型
スーパーマラドーナ	田中一彦 (大阪府)	武智 (愛媛県)	2015	5/4	対話型 実況類B
③ボケ役：非関西／ツッコミ役：関西					
和牛	水田信二 (愛媛県)	川西賢志郎 (大阪府)	2015	8/5	対話型
かまいたち	山内健司 (島根県)	濱家隆一 (大阪府)	2017	4/3	対話型
見取り図	リリー (岡山県)	盛山晋太郎 (大阪府)	2018	4/3	対話型
④ボケ役：非関西／ツッコミ役：非関西					
千鳥	大悟 (岡山県)	ノブ (岡山県)	2003	4/4	対話型
とろサーモン	久保田かずのぶ (宮崎県)	村田秀亮 (宮崎県)	2017	2/1	対話型
からし蓮根	伊織 (熊本県)	杉本青空 (熊本県)	2019	1/1	対話型

表4 東京を活動拠点とするコンビの出身地・漫才の型・発話数

コンビ名	ボケ役 (出身地)	ツッコミ役 (出身地)	初出 場年	ネタ数 / 出場回数	漫才の型
①ボケ役：関西／ツッコミ役：関西					
DonDokoDon	山口智充 (大阪府)	平島啓史 (大阪府)	2001	1/1	対話型
②ボケ役：関西／ツッコミ役：非関西					
ザブングル	加藤歩 (三重県)	松尾陽介 (愛知県)	2007	1/1	対話型
ピース	又吉直樹 (大阪府)	綾部祐二 (茨城県)	2010	1/1	対話型
③ボケ役：非関西／ツッコミ役：関西					
相席スタート	山崎ケイ (千葉県)	山添寛 (京都府)	2016	1/1	対話型
ゆにばーす	はら (神奈川県)	川瀬名人 (奈良県)	2017	2/2	対話型
ニューヨーク	嶋佐和也 (山梨県)	屋敷裕政 (三重県)	2019	2/2	対話型 実況類B
おいでやすこが	こがけん (福岡県)	おいでやす小田 (京都府)	2020	2/1	実況類B

④ボケ役：非関西／ツッコミ役：非関西					
おぎやはぎ	小木博明 (東京都)	矢作兼 (東京都)	2001	2/2	対話型
ダイノジ	大谷ノブ彦 (大分県)	大地洋輔 (大分県)	2002	1/1	対話型
スピードワゴン	小沢一敬 (愛知県)	井戸田潤 (愛知県)	2002	2/2	対話型
アンタッチャブル	山崎弘也 (埼玉県)	柴田英嗣 (静岡県)	2003	4/2	対話型
タカアンドトシ	タカ (北海道)	トシ (北海道)	2004	1/1	対話型
東京ダイナマイト	松田大輔 (岐阜県)	ハチミツ二郎 (岡山県)	2004	2/2	対話型
トータルテンボス	大村朋宏 (静岡県)	藤田憲右 (静岡県)	2004	4/3	対話型
POISON GIRL BAND	阿部智則 (宮城県)	吉田大吾 (東京都)	2004	3/3	対話型
品川庄司	品川祐 (東京都)	庄司智春 (東京都)	2005	1/1	対話型
タイムマシーン3号	関太 (群馬県)	山本浩司 (新潟県)	2005	2/2	対話型
ハリセンボン	箕輪はるか (東京都)	近藤春菜 (東京都)	2007	2/2	対話型
サンドウィッチマン	富澤たけし (宮城県)	伊達みきお (宮城県)	2007	2/1	対話型
ナイツ	埴宣之 (千葉県)	土屋伸之 (千葉県)	2008	4/3	漫談類A
U字工事	益子卓郎 (栃木県)	福田薫 (栃木県)	2008	1/1	漫談類B
ザ・パンチ	パンチ浜崎 (東京都)	ノーパンチ松尾 (東京都)	2008	1/1	対話型
オードリー	春日俊彰 (埼玉県)	若林正恭 (東京都)	2008	2/1	漫談類B
ハライチ	岩井勇氣 (埼玉県)	澤部佑 (埼玉県)	2009	4/4	漫談類B
パンクブーブー	佐藤哲夫 (大分県)	黒瀬純 (福岡県)	2009	4/2	対話型
スリムクラブ	真栄田賢 (沖縄県)	内間政成 (沖縄県)	2010	3/2	対話型
メイプル超合金	カズレーザー (埼玉県)	安藤なつ (東京都)	2015	1/1	対話型

馬鹿よ貴方は	平井ファラオ光 (神奈川県)	新道竜巳 (千葉県)	2015	1/1	対話型
トレンディエンジェル	斎藤司 (神奈川県)	たかし (東京都)	2015	2/1	対話型
カミナリ	竹内まなぶ (茨城県)	石田たくみ (茨城県)	2016	2/2	対話型
マジカルラブリー	野田クリスタル (神奈川県)	村上 (愛知県)	2017	3/2	実況類 B
トム・ブラウン	みちお (北海道)	布川ひろき (北海道)	2018	1/1	実況類 B
オズワルド	畠中悠 (北海道)	伊藤俊介 (千葉県)	2019	2/2	対話型
ぺこぱ	シュウペイ (神奈川県)	松陰寺太勇 (山口県)	2019	2/1	実況類 B
東京ホテイソン	ショーゴ (鹿児島県)	たける (岡山県)	2020	1/1	対話型
錦鯉	長谷川雅紀 (北海道)	渡辺隆 (東京都)	2020	1/1	対話型
ウエストランド	河本太 (岡山県)	井口浩之 (岡山県)	2020	1/1	対話型

### 3.2.2 演者の出身地

まず、演者の出身地を見てみよう。図4に各大会の出場コンビの出身地の組み合わせを集計して示す。

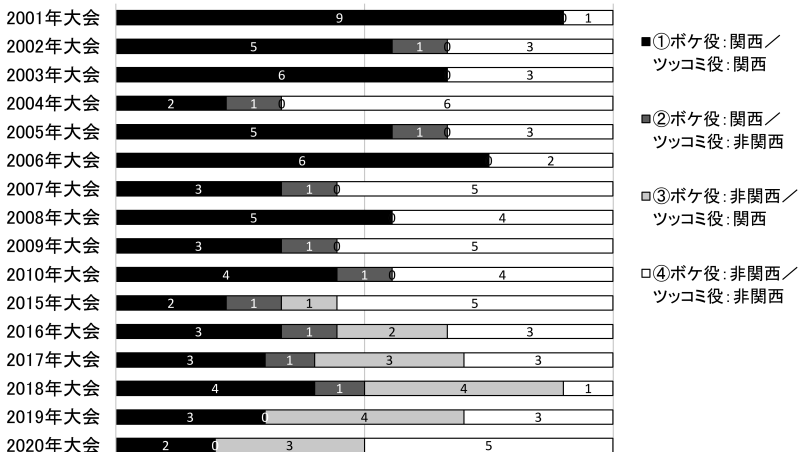


図4 『M-1 グランプリ』決勝出場コンビの出身地

一見して、コンビの両方もしくはいずれかが関西出身である場合が多いことが見て取れる。関西圏の地域社会には「漫才文化」が根付いており、日常会話においても「笑い」を介したコミュニケーションが浸透しているからこそその結果だろう。

そうしたなかで近年の傾向として注目したいのは、ボケ役よりもツッコミ役に関西出身者が多いという点である。表3・表4を見ると、③（ボケ役：非関西／ツッコミ役：関西）のコンビとして、上方系の和牛（2015・2016・2017・2018・2019年大会出場）、かまいたち（2017・2018・2019大会出場）、見取り図（2018・2019・2020年出場）、東京系の相席スタート（2016年大会出場）、ゆにばーす（2017・2018年大会出場）、ニューヨーク（2019・2020年大会出場）、おいでやすこが（2020年大会出場）があり、いずれも休止期間を経て復活した2015年大会以降の出場者であることがわかる。強烈な個性をもつ非関西出身のボケ役が、漫才の掛け合いの呼吸を体得している関西出身のツッコミ役と組むことによって、「漫才らしい漫才」の型を踏襲しつつ破壊する新しい「笑い」の創造者になっていると言えるだろう。

### 3.2.3 漫才の型

次に、漫才の型について見ていく。

#### (1) 対話型

表3・表4をみると、全般的に「対話型」が多いことは明らかであり、「対話型」こそが「漫才らしい漫才」の条件であることが確認できる。なお、表からは直接は読み取れないが、「今の時代は「ツッコミが華」」（埴宣之 2019）と言われており、近年の漫才の傾向として、ボケ主導の漫才からツッコミ主導の漫才への転換が顕著である。ツッコミ主導の漫才とは、ツッコミ役のリアクションや意表を突いたツッコミフレーズが「笑い」を生むもので、「対話型」の漫才にもこのタイプが多く見られるようになっている。「ツッコミのありかたに新風を吹き込んだ」（太田 2021）と評される南海キャンディーズ（2004・2005・2009年大会出場）がその先駆者だとされるが、近年では、上方系の銀シャリ（2010・2015・2016年大会出場）、見取り図（2018・2019・2020年大会出場）、ミルクボーイ（2019年大会出場）、東京系のカミナリ（2016・2017大会出場）、オズワルド（2019・2020大会出場）、東京ホテイソン（2020大会出場）、ウエストランド（2020大会出場）などが該当するだろう。

#### (2) 演説型：漫談類

「演説型」は、「ぼやき漫才」の型を踏襲する「漫談類A（ボケ漫談）」が、上方系のますだおかだ（2001・2002年大会出場）、ハリガネロック（2001年大会出場）、

アジアン（2005年大会出場）という2000年代前半の大会出場者に見られ、東京系では2000年代後半の大会でナイト（2008・2009・2010大会出場）がこの型のネタを披露している。東京系にはツービートなどの先駆者がいることから、「漫談類A」は、東西ともに漫才の型として定着したものとなっていることがうかがえる。

それに対して「漫談類B（ツッコミ漫談）」は、上方系では中川家（2001年大会出場）のネタの一部に見られるものの、本ネタの大部分がこの型で演じられるのは、東京系のU字工事（2008年大会出場）、オードリー（2008年大会出場）まで現れていない。東京系では、この型の先駆者として爆笑問題がいるので、その影響が東京系のコンビに現れているのかもしれない。また、典型的な「ツッコミ漫談」とは言えないが、東京系のハライチ（2009・2010・2015・2016年大会出場）のネタも「漫談類B」の特徴をもつ。ハライチのネタは、「対話型」で始まるものの、途中からボケ役の岩井勇気の発する奇想天外なフレーズに合わせて、ツッコミ役の澤部佑が困惑しながらもっともらしいコメントやリアクションをしていくという形を取る。澤部の発話は丁寧体を基調としており、単なる「合いの手」ではなく「話題提供」となる対聴衆発話を行っていると思わせることから、「漫談類B」の一種とした。

「漫談類」は図3にも示したように、ボケ役・ツッコミ役のいずれれもが聴衆に向けて話しかける形を取るが、その発話は同時に相手にも向けられているので、自在に「対話型」の掛け合いに切り替わり得る。また、「対話型」の漫才であっても、〈開始部〉のあいさつや〈主要部〉の話題の切り出し部分では対聴衆発話が行われることが多いので、「対話型」と「漫談類」は、いずれも「漫才らしい漫才」と認識されている談話型であると言える。そのなかで、ボケの発話量の多い「漫談類A」が先行して現れ、ツッコミの発話量の多い「漫談類B」が遅れて現れるのは、ボケ主導の漫才からツッコミ主導の漫才への転換が、2000年代の10回の大会のなかでも進行していたことをうかがわせる。

### (3) 演説型：実況類

「演説型」のうち、「実況類A」と見なせるのは、上方系の麒麟（2001・2003・2004・2005・2006年大会出場）のネタである。麒麟はまったく無名であった結成2年目に『M-1グランプリ』の第1回大会に出場し、斬新なネタ運びで注目を浴びた。そのネタは、ツッコミ役の田村裕による「冬の街に一人で出かけて楽しむ男の一人芝居」の動きに、ボケ役の川島明がまったく無関係なナレーションをつけるというもので、前半の伏線（一人芝居）を後半に回収（ナレーション）する構成となっている。ネタの前半部分は「対話型」で進み、後半部分も「対話型」を織り交ぜなが

ら展開するため、漫才として見ても違和感はない。麒麟のネタは、「漫才らしい漫才」の型を踏襲しつつ破壊する、すなわち新たな「笑い」の創造をもくろむものであったことは間違いなく、『M-1 グランプリ』のコンセプトを視聴者に強く印象づけるものとなった点で大きな意味をもつ。ただし、「実況類 A」を採用するコンビはその後現れておらず、漫才の談話型としては特殊なものであるとは言えるだろう。

「演説型」のうち、「実況類 B」は近年の漫才のトレンドとも言えるものである。ボケ役のみがコント設定のキャラクターに扮し、ツッコミ役がそれに対してコメントをするという形は、2000年代にもスピードワゴン（2002・2003年大会出場）、南海キャンディーズのネタの一部にその片鱗が見られるが、ネタの主要な部分をほぼこの型で演じるものは、2015年大会以降に多い。上方系では、スーパーマドラーナ（2015・2016・2017・2018年大会出場）、霜降り明星（2018年大会出場）、東京系では、マヂカルラブリー（2017・2020年大会出場）、トム・ブラウン（2018年大会出場）、ニューヨーク（2019・2020年大会出場）、べこば（2019年大会出場）、おいでやすこが（2020年大会出場）が、「実況類 B」を本ネタの主要部分で採用している。

「実況類」は、演者間に掛け合いがないうえに、演者の一方がコント設定の仮想キャラクターに扮している（動きのみで発言しない場合もある）ため、舞台上で「生の発話」を行っているのは「実況」を行う一方の演者のみとなる。「コント漫才」を「しゃべくり漫才」から切り離して捉えようとする現在の「漫才観」からすれば、「漫才らしい漫才」からは相当隔たった談話型だと言える。

「実況類」を採用している漫才は、「対話型」を織り交ぜながらネタを進行させるものが多い。先にも述べたように、「実況類 A」を採用している麒麟のネタも、「対話型」を織り交ぜながら進行する。また、マヂカルラブリーと同様に、「実況類 B」を採用したネタで優勝した霜降り明星には、「あれは漫才なのか」論争は起きなかったが、それは霜降り明星のネタが、「対話型」の掛け合いを織り交ぜながら、笑いどころを「実況類 B」で見せるというものだったからだろう。関西出身コンビの麒麟や霜降り明星は、テンポのよい掛け合いを織り交ぜることによって、「漫才らしい漫才」の型を踏襲する姿勢を示したのに対し、非関西出身コンビのマヂカルラブリーは、あえて「漫才らしい漫才」の型を破壊する方向に振り切ったように見える。

表5は、上方系／東京系のコンビの出身地グループごとに、ネタに採用された漫才の型を集計したものであるが、相対的に新しい型である「実況類 B」を、非関西出身の演者（特に東京系の非関西出身コンビ）が採用していることが見て取れよう。



表5 コンビの活動拠点・出身地と漫才の型

活動拠点		大阪拠点（上方系）				東京拠点（東京系）			
出身地*		①	②	③	④	①	②	③	④
コンビ数		29	2	3	3	1	2	4	30
対話型		26 (90%)	2 (100%)	3 (100%)	3 (100%)	1 (100%)	2 (100%)	3 (75%)	21 (70%)
演 説 型	漫談類A	3 (10%)	-	-	-	-	-	-	1 (3%)
	漫談類B	-	-	-	-	-	-	-	3 (10%)
	実況類A	1 (3%)	-	-	-	-	-	-	-
	実況類B	1 (3%)	1 (50%)	-	-	-	-	2 (50%)	3 (10%)

※ ①ボケ役：関西／ツッコミ役：関西      ②ボケ役：関西／ツッコミ役：非関西  
 ③ボケ役：非関西／ツッコミ役：関西      ④ボケ役：非関西／ツッコミ役：非関西

「実況類」の出現を経年的に見れば、ボケの発話量の多い「実況類A」を採用する麒麟の登場は2000年代前半の大会であり、2000年代前半まではボケ主導の漫才が主流であったことがうかがえる。それに対して、2015年大会以降に現れた「実況類B」は、ツッコミの発話量の多い談話型であり、この時期にボケ主導の漫才からツッコミ主導の漫才への転換が、加速度的に進んだものと見られる。

#### 4. おわりに

現在、東京漫才界のリーダー的な存在と目されるナイツのボケ役の塙宣之氏は、以下のように述べている。

関西には漫才とはこういうものだという伝統と文化がしっかり根付いています。

なので、(ハライチの)澤部のようにボケ続けるツッコミとか、僕らのように相方を一切見ないボケとかは、考えられないと思います。

そうした戦術は大阪の漫才師にとって、相撲で言えば「変化」であり、もっとなんて「禁じ手」という感覚だと思います。

相撲でいう「ひとまずぶつかれ」同様、関西には、漫才たるもの「ひとまず

掛け合って、テンポよくしゃべれ」という大原則がある。

それゆえ、うまいなとは思うものの、発想でぶっ飛んでるなど思わせるような規格外のコンビは大阪からはあまり出てきません。

そこが関東芸人の生きる道です。突き抜けた武器を手にする如果能够できれば、関東芸人でもM-1で勝てるかもしれない。(埴 2019 : 140)

「漫才らしい漫才」の踏襲と破壊のせめぎ合いのなかで、新しい「笑い」が生まれていくとき、その先鋒に立つのが非関西出身者であるとすれば、それは東西の「笑い」の〈止揚〉として捉えることができるだろう。

東京一極集中の現代日本社会において、「東京」と「地方」がしのぎを削って〈止揚〉を目指せる分野は多くない。東西の「笑い」をめぐる過去100年の動態は、現代日本社会に、「東京」を相対化する視点を与えてくれるものと思える。

## 付記

本研究の一部は、JSPS 科研費 16H01933、20H00015 によって行った。また、本稿の構想にあたっては、2021 年度の関西大学での授業（文学部「国語国文学専修研究 4」、文学研究科「M 国語学研究 B」）の受講者および卒業論文で『M-1 グランプリ』の分析に取り組んでいる貝塚太一氏との意見交換を参考にしている。

## 注

- 1) 東京の老舗の寄席演芸場（浅草東洋館、上野鈴木演芸場、新宿末廣亭、池袋演芸場など）を活動拠点とする東京漫才と、大阪の吉本興業が経営する劇場（なんばグランド花月等）を活動拠点とする上方漫才には、依然として寄席文化の東西差が維持されているように見受けられるが、テレビ番組のコンテンツとしての漫才は、東西の境界なく、全国に発信される状況になっている。
- 2) 1982 年に大阪に吉本総合芸能学院（NSC 大阪校）というタレント養成所を創設して若手芸人の育成をはかり、その第 1 期生のダウンタウンが爆発的な人気を得たことで、会社自体が東京に本格進出するところとなった。1995 年には NSC 東京校を開校し、NSC 出身の芸人たちは吉本興業が運営する劇場を活動拠点としつつ、テレビタレントとしても活躍している（『吉本興業百五年史』参照）。
- 3) 松本人志（1963 年・兵庫県・ボケ担当）と浜田雅功（1963 年・兵庫県・ツッコミ担当）のコンビ。1982 年に NSC 大阪校に第 1 期生として入学し、コンビ結成。

東京に本格進出した後の1990年代には、『ダウンタウンのガキの使いやあらへんで!』（日本テレビ系：1989年～現在）の漫才風のフリートーク、『ダウンタウンのごっつええ感じ』（フジテレビ系：1991～1997年）の斬新な設定のコントにより、新たな「笑い」を創出し、後進世代に影響を与えた。

- 4) 上岡龍太郎（1995）に以下の記述がある。「いと・こい先生らは兄弟で、二人が二軒続きの家で、間に電話を置いて、ちゅうのはほくらでも知ってたけど、ネタとしては別に兄弟っていうのをわからんままに進んでたのもありましたからね。ダイ・ラケ先生とこも兄弟やのに、「うちの親父と子どもが結婚して」ちゅうネタをやってました。」（上岡1995：284-285）
- 5) 戸田学（2016）に以下の記述がある。「しゃべくり漫才という芸は、本来、男性同士（あるいは女性同士、男女とも）が、立ち話をしているのを、観客は横手から聴いているという芸能スタイルであった。それがだんだんと演者自身が、客席へ話しかけるスタイルになり、さらには観客がコンビの私生活を知った上でないと成り立たない笑いの漫才まで登場した。その代表的な存在が横山やすし・西川きよしであった。」（戸田2016：205）
- 6) 1893～1971年。滋賀県生まれ。はじめ落語家を志し、後に漫才に転向して「ぼやき漫才」を打ち立てた。相方は、都家美智代、都家静代、芦乃家雁玉、荒川歌江の4人とコンビを組んだ。
- 7) 同じコンビが複数回決勝に出場する場合もあるため、出場回数と順位によって、披露したネタの本数は異なる。なお、テツ and トモ（2002年大会出場）は全編歌ネタであるため除き、ザ・プラン9（2006年大会出場）は5人組であるため除き、カナリア（2010年大会出場）のネタは資料としたDVD未収録であるため除いた。また、銀シャリの2016年大会の1本目のネタもDVD未収録であるため除いた。
- 8) NSC出身者については、大阪校出身者は大阪拠点とし、それ以外は東京拠点とした。アマチュアの変ホ長調（2006年大会出場）は、演者の二人がともに関西出身であり、関西の小劇団での活動歴があるため大阪拠点とした。

## 参考文献

- 相羽秋夫（1995）『上方漫才入門』弘文出版  
 相羽秋夫（2001）『漫才入門百科』弘文出版  
 太田省一（2021）『すべてはタモリ、たけし、さんまから始まった』筑摩書房  
 上岡龍太郎（1995）『上岡龍太郎かく語りき—私の上方芸能史—』筑摩書房

- 元祖爆笑王編 (2015) 『しゃべくり漫才入門』 立東舎
- 獅子てんや・瀬戸わんや監修 (1969) 『漫才漫談一週間上達法』 新風出版社
- 戸田学 (2016) 『上方漫才黄金時代』 岩波書店
- 埴宣之 (2019) 『言い訳 関東芸人はなぜM-1で勝てないのか』 集英社
- 日高水穂 (2018) 「談話展開からみた〈創生期〉の東西漫才」『国文学』102、関西大学国文学会
- 日高水穂 (2019) 「役割関係からみた〈完成期〉の東西漫才」『国文学』103、関西大学国文学会
- 日高水穂 (2020) 「発話方向からみたマンザイブーム期の東西漫才」『国文学』104、関西大学国文学会
- 日高水穂 (2021) 「結末部分の定型化からみる東西漫才」『国文学』105、関西大学国文学会
- 前田勇編 (1966) 『上方演芸辞典』 東京堂出版
- 前田勇 (1975) 『上方まんざい 八百年史』 杉本書店
- 吉本興業 (2017) 『吉本興業百五年史』 吉本興業・ワニブックス

#### 調査資料

朝日放送テレビ・吉本興業制作 DVD: 『M-1 グランプリ 2001』 / 『M-1 グランプリ 2002』 / 『M-1 グランプリ 2003』 / 『M-1 グランプリ 2004』 / 『M-1 グランプリ 2005』 / 『M-1 グランプリ 2006』 / 『M-1 グランプリ 2007』 / 『M-1 グランプリ 2008』 / 『M-1 グランプリ 2009』 / 『M-1 グランプリ 2010』 / 『M-1 グランプリ 2015』 / 『M-1 グランプリ 2016』 / 『M-1 グランプリ 2017』 / 『M-1 グランプリ 2018』 / 『M-1 グランプリ 2019』 / 『M-1 グランプリ 2020』

(ひだか みずほ／本学教授)